

件整備の一端を傍証する状況証拠に評価できるものではなかろうか。郷の分離設立は、郷としての規準を満す水田面積の充足を前提にすると考えられるので、他郷の周辺部を分割再編成だけでは、特別の政治的背景のある場合を除けば、設立する意味に欠け、当然に氾濫地や荒廃地の安定地形化（開拓の成果）に伴う水田の拡大に依拠すると考えられる。従って、発掘地の伝統的な居住地を押圧しての一带の削平による水田化は、まさに郷の設立と軌を一にする現象ではなかろうか。

一方、荘園化への動向と遺跡形成の状況は、即応的に関連付け難いが、洪水堆積（G層）後にこの地点から北西方向一帯が微高地として居住区域に転用されていることは、洪水堆積後の整地や従前状態（水田）への回復施策を放棄していることであり、この領域としての自主的な土地利用の状況を示すと判断され、国衛領を離れた独自の土地の運用の結果とも見做すことのできるものである。この仮定の是非を別にして、鎌倉時代のこの地区における居住区域の形成は、荘園の経営に深く関与していることは間違いないであろう。

いずれにしても、此度の岡山市立庄内幼稚園の建設に伴う発掘調査は、この地点が、各時期を通して遺跡形成の縁辺部に位置していたことを明らかにした。従って、三手遺跡の発掘調査成果は、発掘の結果判明した遺跡の中心方向である北西部（現在の三手集落所在地区）一帯の発掘調査を待たなければ、遺跡の再構成と評価が困難な実状にあるといえよう。

（出宮徳尚）

3. 高台付塚に関する二・三の整理

さきに（第四章 4. 土師質土器）紹介した高台付塚は、岡山県南部で早島式と呼び慣らわされている土器であるが、その実態については十分な究明がされているとは言えず多くの課題を残している。

今回、当遺跡出土高台付塚を評価するに際し、現時点での早島式土器に関する理解内容を確認しておくため、既説の整理と検討を行なった。以下、事実の確認と若干の検討事項とを述べまとめに換えたい。

〈略史〉

早島式土器の名称は、1937年、水原岩太郎の命名による。水原は、早島丘陵にて塚を専門に焼成していた「土師土器」窯の発見と調査を契機とし、その塚を便宜上一般の「土師土器」から分類して早島式土器と命名した。¹³

水原は、その塚の特徴を脆弱質にて白色～赤黄色を帯び、口径5寸（約15cm）、高さ2寸（約6cm）程の「糸敷」を有す薄手塚と述べ、「平安朝初期」の年代と推定した。更に、窯の構造・規模にも触れ、早島式土器の全容を紹介した。¹⁴

水原は窯資料から早島式土器を提唱したため、その分布や生活址での在り様に言及することはなかった。当時における資料的制約もあり、無理からぬことであろうが物足りない点でもある。

水原の命名から30年を経過した1967年、鎌木義昌は、瀬戸内における中世窯業のむすびとして早島式土器に触れた。^⑮

鎌木は土着土器の一樣相として例示し、次のようにまとめた。分布が岡山県南部、特に児島半島を中心として島嶼部にも点々と認められ、主として貝塚から発見される。形態は碗形に限定される薄手灰白色の土器であり、貝塚の伴出遺物から平安時代～鎌倉時代初期にかけての年代と推定した。更に、早島式土器に代表される土着土器が「生活拠点の近くで随時生産」されたと想定するとともに、土師系あるいは須恵系のどちらに発生母胎が求められるのかと系譜問題に初めて注意を促した。この問題は、現在も結着をみていない。^⑯

鎌木のまとめは、当時における発掘成果を取り入れ、水原の報告内容をより限定・補足した貴重なものであった。これにより、年代はやや新しく位置づけられ、分布や性格づけなどが明示され、早島式土器の実体について補強された。今日理解されている内容は、水原よりも、むしろ鎌木のこのまとめに依っていると思われる。

最近では、この種碗の出土例が増し、資料集積が進行している。そのような中で、事例紹介に留まらず碗の歴史的意義づけを試みた報告もみうけられ、碗研究の著しい進歩が伺える。

鎌木のまとめも、一部修正が迫られているように思われる。例えば、貝塚に限らず集落址からも多量に出土し、年代も平安時代末～鎌倉時代全期、あるいは室町初期までの巾が考えられてきている。更に、碗形に限定せず小皿も早島式土器に含めるとの理解も登場してきた。

このような新説は研究の進展のうえでは喜ばしいことであるが、反面、早島式土器の実体把握について混乱が生じてきているようにも思える。そこで、最新の動向を示す報告例を検討材料として紹介する。

1977年、川入遺跡P-9^⑰において、多量の碗・小皿および坏・埴類が一括廃棄の状況で検出された。その出土物の整理を担当した中野雅美は、碗・小皿の詳細な観察から製作工程の復原を行ない、更に、法量の統計操作から規格性があることを指摘し、構築的窯での焼成をその一要因として挙げた。それにとどまらず中野はP-9出土の「土師器（碗・小皿の大半・杯・台付杯）」が、胎土、焼成、製作技法から判断して「同一生産地（土器製作専門工人集団）」で生産され「一元的」に川入遺跡に供給されたとし、その背景に、「自立的傾向にある小規模な専門工人集団（家族的手工業）」あるいは「荘園制下に繰り込まれた専門集団」と「需要者（組織）」との間に「契約的な需要・供給の関係」のあったことを想定した。

中野のこのまとめは、専門工人集団の存在とその集団が製作した器種構成を示唆し、さらに

莊園制と関連させて製品供給の機構について言及したもので、埴研究に重要な問題を提示した。しかし、資料的制約もあってこの問題について、以後検討あるいは深化されることもなく今日に至っている。

1980年に、埴を焼成した窯址が発見・調査された。¹⁹ 沖ノ店1号窯である。小皿も焼成されていたらしい。年代は熱残留磁気測定結果(A.D.1190±60)から平安時代後半と推定されている。ただ、ここから出土した埴は糸切り底を持ち、従来知られていた早島式土器とは異なる。埴の地域性を示す好例である。この埴を報告者(浅倉秀昭)は、「小坂という莊園内における窯であって、早島式土器とは形態と異にしている^(ママ)」¹⁹と記し、早島式土器とは把握しない立場を示唆した。この点と、報告中に浅倉がまとめた早島式土器の定義については特に触れておかねばならないので後述する。

ともあれ、沖ノ店1号窯の発掘は、早島式土器にも貴重な資料を提供した。

最近、福田正継は、埴について製作工程復原や編年試案など多岐にわたりまとめた。²⁰ とりわけ編年試案は、今まで体系づけられ公表されていなかっただけに、今後の指標となる業績である。すなわち福田は、畿内の瓦器埴の変遷などを念頭に、技術の簡略化と法量の縮小化傾向をもとに埴の編年を組み立てた。その際に、沖ノ店1号窯例を最古に位置づけ、終末を尾道市街地遺跡の発掘所見から室町時代初期とし、その間を法量順に並べ充填していったのである。

この編年は、層位的に裏打ちされておらず機械的序列であること、および地域差を考慮しなければならないとしながらも、地域差をある程度無視して組み立てられていることなどに疑問が残る。これは現資料での限界であるだけに今後の検証が必要である。

その他、福田が埴の変遷から平安時代後期に大きな画期を認め、それが外来磁器の影響によると推測していることも記しておく。早島式土器の成立について示唆的だからである。

以上早島式土器に関する代表的報告について簡単に触れた。現況はおおむね理解していただけるものと思う。

さてここで、さきに省いた浅倉の早島式土器の定義にたちかえる。

浅倉は早島式土器について次のように記した。「備前、備中の南部を中心に古代末～中世の遺跡でよく出土する黄白色^(ママ)と～白色を呈する断面三角形の貼り付け高台を有する碗形土器と小皿の組合せの土器」で「時期は平安末～鎌倉時代全般にわたる出土例が知られている。」²¹と。

浅倉は埴と小皿を早島式土器の構成器種と理解したのである。それは沖ノ店1号窯の発掘所見からの当然の帰結であり、早島式土器にもその所見を適用したものである。

しかしこのような認識は浅倉が初めてではない。すでに中野が、明記こそしていないものの同様の認識を示唆している。²² しかし、これらの認識は現在のところ大勢を占めるに至っていない。ただ傾向として、埴と胎土・色調が同じ小皿の存在が指摘されており、²³ その二者が密接な

関係にあることを伺わせている。沖ノ店1号窯の例に基づけば、同一窯にて同時に焼成されていた可能性は高いと思われる。

ここで水原の報告に再度触れておく。水原は埴を専門に焼成していたと判断したからこそ、その埴に早島式土器と命名したのである。ところが、同報告中に「糸敷ナキモノ」が少量検出されたことも記されている。これが小皿を指すのであるかどうかははっきりしないが、そうであれば沖ノ店1号窯と同様の事例となる。現在もはや検証の術はないが、埴と胎土・色調を同じくする小皿の存在と沖ノ店1号窯例に事例を求め、早島式土器は埴に限定されるべきではなく、小皿と組合せて把握するべきであると理解しておきたい。その意味で筆者は、浅倉の定義を認める立場にある。

ところが、高台付埴焼成の全期間にわたり小皿と組合わされて焼成されたかは判明していない。かえて法量の縮小化につれ褐色味が強くなり早島式土器の一特徴からは懸け離れるようになり、それにつれ同じ胎土・色調の小皿を見い出すことが困難となる。三手遺跡では第Ⅲ・Ⅳ群の段階がこの状況に相当する。つまり、高台付埴存在期間の後半では埴と小皿の組合せ焼成に否定的要素が強く、従って定義中に埴と小皿の組合せと明記するのは却って誤解を招きやすいと思われる。

以上のことを考慮して、早島式土器を次のように理解しておく。

すなわち、早島式土器とは備前・備中の南部で平安時代末から鎌倉・室町初期頃まで生産された白色ないし淡黄褐色を帯びた高台付埴を主として指すが、埴と同時焼成されていた他器種（例えば小皿）をも含めて総称するのに用いる。

今後、早島式土器は地域的・編年的に細別されるであろうが、その細別型式名は基礎資料を提供した遺跡名を冠し、早島式土器〇〇型（タイプ）と表記したい。例えば沖ノ店1号窯例は、早島式土器沖ノ店型と表記される。

〈高台付埴製作工程の復原〉

早島式土器の地域的・編年的細別の確立は、実態究明のためにも急務であるが、形態の多様性に惑わされ果たされていない。しかし、沖ノ店型で技法上の地域的特性が初めて認識された。このように高台付埴製作工程の復元的検討を行なうことにより地域性の判別に有効な手掛りを提供することは明らかである。

そこで三手遺跡出土高台付埴の製作工程を復元的に記し、他遺跡との比較資料として提供したい。小皿に関しては僅量につき今回は省いた。

高台付埴の製作工程に関しては、すでに中野・浅倉・福田らによって復原されている。ここでは三者と重複する部分はなるべく簡単に記し、異見と留意点を強調して述べたい。高台付埴は、(A)素地土準備、(B)成形・調整、(C)焼成の各工程を経て製品化される。

その各工程について検討してみよう。

(A) 粘土採集、調合などの作業を経て素地土が準備される。

三手遺跡出土高台付埴では、3～4種ほどの異なる胎土が識別されている。これらは(A)工程で生じた素地土の質差を反映していることは明らかである。ただこの質差が同一工人の製作時間差なのかあるいは別の工人の製品を示すものかは明らかでない。今後、各遺跡出土高台付埴の胎土の比較検討作業を進め、類似胎土を纏めて行くならば各胎土ごとの分布域が明瞭になり、生産地や流通圏などを解明する糸口を提供するであろう。これからの作業課題である。

(B) は更に次の各工程が想定できる。

(I) 体部成形、(II) 体部調整、(III) 高台成形、(IV) 高台調整である。

(I)、接合痕の観察から粘土細巻きあげ成形と推定され、轆轤水びき成形とは考えられていない。回転台上にて作業していたかどうか未確定である。今のところ、外底部にヘラ切りの痕跡を残す例が若干みられるようであるが、糸切り痕は認められないことが判明しており、この点、沖ノ店型とは明瞭に区別される。ここでは掌上にて成形・調整されたと理解しておくが、まだ検討を要す。²⁹

(II)、通例的には次のような調整痕がみられる。

①口縁部＝横ナデ、②内面＝丁寧なナデ、③外面上半＝横ナデ、④外面下半＝雑なナデおよび掌痕などである。各調整の手順は①→②が確実であるが、③・④に関しては確定できない。恐らく④→③と思われ、しかも①・③は同一工程であるから④→①・③→②の手順となろう。

ただ、この調整法および調整手順は画一的でなく個体差が認められる。顕著な例では、外面下半にナデ以外に雑ながらもヘラ磨きのみられる例がある。当遺跡高台付埴第Ⅰ群土器が良例である。この調整法は管見にでも幡多廃寺址遺跡³⁰、鹿田遺跡³¹、二日市遺跡³²、沖ノ店1号窯址³³らに散見される。これら高台付埴は、概して法量が大きく、造りも丁寧な点で共通の特徴を示す。この特徴が編年あるいは地域性の指標として有効かどうかは現在のところ判断が難しいが、沖ノ店型との共通性を重視すれば、古式に属す可能性が強い。

その他、外・内面の一部に板目整形痕を残す例もみられる。整形時の板状用具の普遍的な使用を示すものかどうかは不明である。

ともあれ、体部調整の細部にわたる究明は、これからの研究に期待される。

(III)、高台は輪状の粘土紐を体部に貼付し形成する。今のところ削り出し例は皆無である。高台径の縮少とともに低平化し、粘土接合状況の明瞭なもの、あるいは完周しないものがみられるようになる。つまり成形・調整が雑になる傾向にある。

高台径の多様性が用途、編年、地域性あるいは単に工人のくせのいずれに起因するものであるかは不明である。

(Ⅳ)、高台形態はナデ調整時の微妙な力加減の影響を受ける。高台に踏んぱりタイプと直立タイプとの二態みられるのがその反映である。また、横ナデは高台付け根と接地部周辺と二手順行なう例、それにナデ痕のかろうじて認められる例とがみられ、後者は径小高台例に多い。

接地部にヘラで平坦面を形成する例と高台の一部がヘラで押圧されたかのような変形を示す例もある。前者は意図した工程として認められるが、後者は乾燥時における偶然的な変形と思われる。

(B) から (C) へ至る過程に乾燥期が存する。高台接地部および体部内面に往々みられる粘土残痕は、この時に生じたものである。この粘土残痕は円弧状を呈すので高台付着痕であるのは明らかであるが、これは生乾き状態のときに重ねて乾燥させたため互いに付着し、分離するに際しこのような痕跡を残したものと考える。これを重ね焼の証拠とは解釈しない。なぜならば粘土残痕と重ね焼のため発生する円形桃変色部の輪郭が一致せず、ずれている例がいくつでもみられること。それに窯内温度が融着する程まで高温にならなかったと思えるからである。

なお、(Ⅱ) 一②と(Ⅲ)の作業は両者とも生乾きの状態で行なわれ、高台付焼の製作工程上に休止期のあったことを伺わせている。これは一製品を一気に製作し完了させたとするよりも、複数の体部を形造ったのち高台の成形に移るといった作業工程によるものと思われる。

(C) 十分な乾燥期間を置いて窯詰・焼成へと作業は進む。

焼成が構築窯でなされていたことは、沖ノ店1号窯の例を挙げるまでもなく、既に水原の明記するところであった。また、積み重ねて焼成されていたことも、体部内底面と口縁部内外とに桃変色部のみられことから明白である。

一方、焼成災がどのような状態であったかの推定は容易でない。製品の色調が白色から褐色までと実に多様であるからだ。ただ褐色や桃色を滞る製品のみられることから判断して、酸化炎焼成であった可能性が強い。

④
三手遺跡第Ⅰ・Ⅱ群高台付焼は乳白色あるいは淡黄白色と白色系が多い。後述のように第Ⅰ・Ⅱ群が古式形態を示すものであれば、早島式土器は白色を意識して焼成されていたと想定するも可能であろう。とするならば、製品を白色に仕上げるためには胎土の厳選以外に、密閉窯といえども炎状態の管理および間のタイミングなど熟練さを要求されたことであろう。窯の構築とともに、ある程度専門化した工人の存在が想定されるのである。ところが、第Ⅲ・Ⅳ群になると褐色系が目立ってくる。色調に注意が払われなくなってくるのであろうか。法量の縮小、調整の簡略化傾向と歩調を同じくするのが興味深い。

焼成温度は陶器に至る直前ぐらいのものであろうか。中には表面にガラス光沢を呈し陶質を示す個体もみられるが数量的には多くない。これは窯内において局所的に高温に至った部分の例外的な製品であろう。

以上、高台付塚製作工程について略述した。認識不足、観察の誤りなどを多々犯しているものと思うが、今後の課題、留意事項として受けとめて頂きたい。

〈高台付塚の編年〉

早島式土器の盛行年代は、略史に紹介のとおり大筋において一致するものの、各々微妙に食い違う。消滅時期についてはなおさらである。この提示されている年代は現在のところ併存状態にあり、相互の比較、検討を通して交差させることができないでいる。というのも、早島式土器の形態分類も、地域性も確立していない現状では比較のための指標を持ってないからである。もちろん、形態差から編年の可能性を考える動向がなかったわけではない³⁵。しかし、簡略な記述であったため周知化することはなかったようである。

福田は、このような現状下のもとで高台付塚の成立から消滅までの編年体系を提示したものであり、ここに初めて各地域相互の年代比較が可能となる下地が用意された。もちろん福田編年には略史で述べたように問題が無いわけではない。が、その意義は高い。

さて、ここでは前章で4群に大別した高台付塚の年代について考えてみる。ただ三手遺跡では、中国産青磁片がE層から出土したのみで、年代決定の良好な資料に欠ける。そのため、他遺跡の事例との比較検討により年代を推定する方法をとるが、その際に比較根拠の明示に努め、第三者の検証を待ちたい。

(1) 沖ノ店1号窯資料

熱残留地磁気測定により絶対年代の推定された貴重な例である。ここから出土した高台付塚は、体部下半にまで丁寧に調整される点が特異である。この特徴的調性法は岡山市鹿田遺跡・同二日市遺跡出土高台付塚にもみられ、沖ノ店遺跡周辺だけの地域に限定されるものではない。これら塚は器形も似かよっていることから、上記調整はこの時期の特徴として一般化されるものであろう。

とするならば、当第I群土器の形態は若干上記塚と異なるが、調整法においては一脈通ずるものがあり、沖ノ店1号窯例と近似かやや降る年代に比定できると思われる。すなわち、13世紀前後頃³⁶の年代に位置づけたい。

(2) 鹿田遺跡南壁大溝炭層一括資料³⁷

遺跡の一隅に大溝が検出された。その大溝の埋土中から高台付塚・小皿・須恵器片・須恵質塚ら³⁸が出土した。この遺物類は、炭・灰・焼土とともに一括投棄あるいは埋積状況を示すものと判断される。

須恵質塚は轆轤びき成形、糸切底、そして重ね焼きによる黒色の帯が口縁部をめぐるなどの特徴を示し、備前焼I期³⁹にみられる形態である。すなわち、これらの一括遺物は、12世紀後半から13世紀初頭の年代が想定されるのである。

さて、この高台付碗は体部下半にまでヘラ磨き調整が施され、しかも法量が大きい。第Ⅰ群土器はこの高台付碗と胎土は異なるが形態・調整など似かよっているのも、同期かやや降る年代と思われ、13世紀前後頃に位置づけられよう。この年代は、前記沖ノ店1号窯例から得られた第Ⅰ群土器の年代とも矛盾しない。

(3) 鹿田遺跡北東隅大溝出土資料³⁹

大溝埋土中に多量の高台付碗と小皿、および輸入磁器・互器らが出土した。埋土は下層・中層・上層の3層に分層され、各層ごとに遺物はとりあげられた。下・中層出土の高台付碗は、ほぼ同一の形態的特徴を示し、三手遺跡第Ⅱ群土器に類似する。

下層・中層から各々互器碗小片が出土している。この互器碗は和泉型で、13世紀後葉頃に定される。また同一層から出土している輸入磁器は龍泉系窯の皿で、淡緑色釉が掛けられ、内面には櫛歯文がみられる。年代限定は困難であるが、他出土物と年代的に矛盾しないとのことである。更にこの大溝を切断する溝が検出され、この溝の埋土から三手遺跡第Ⅲ群土器類の高台付碗が出土している。このことから第Ⅱ群と第Ⅲ群とでは第Ⅲ群土器の方が時代的に降ると推定される。

一方、岡山市天神湯遺跡 TⅠ西部土器溜ピット⁴²では第Ⅱ群と第Ⅲ群土器に類似する高台付碗が出土している。しかし、第Ⅲ群を主とし第Ⅱ群土器は散見される程度の出土であるから、第Ⅲ群土器が主として生産された一時期の存在を設定しても良いと思われる。従って鹿田遺跡例から、第Ⅱ群土器は13世紀後葉、第Ⅲ群土器は第Ⅱ群よりやや降る14世紀前半ごろの年代に比定されよう。

(4) 延寿寺跡遺跡

寺院廃絶後の形成による包含層を切り込み構築されている井戸が検出された。この包含層⁴³からは三手遺跡各群の特徴を有す高台付碗が散見されている。従って、井戸の構築年代が判明すれば、高台付碗の下限年代の推定が可能なのであるが、残念ながら井戸の構築年代は不詳である。しかし、埋土から備前焼・丹波焼・亀山焼片などが出土しており、その年代観から室町時代中葉頃には埋没していたと推定されている。しかも埋土中には高台付碗が検出されていない。このことから高台付碗の存在期間は降りても室町時代中葉頃までと思われるが、包含層の形成と井戸の使用期間を考慮するならばやや遡るであろう。ここでは年代巾を持たせて15世紀代と理解しておきたい。

岡山市教育委員会の調査例を中心にして高台付碗の編年を考えてきた。しかし、第Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ群の変遷は推定できたが、第Ⅳ群土器に関しては資料不足のため不明である。取り敢えず、第Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ群の変遷状況から高台縮少傾向を認め、第Ⅳ群土器を高台付碗の終末形態として把握しておきたい。

さて、現在のところ年代が推定されている高台付埴は、管見によれば、沖ノ店1号窯例と百間川当麻遺跡井戸3^④出土例ぐらいのものであろう。これら例と前述の編年観とには齟齬をきたさないものだろうか。

沖の店1号窯例については既に述べた。当麻遺跡井戸3出土高台付埴は、三手遺跡第Ⅱ群土器の範疇に含まれる特徴を有す。しかし、井戸3出土例中に造り、調整が若干丁寧な個体が見られ、第Ⅱ群土器でも古相を示していると思われる。この井戸3からは備前焼Ⅰ期にみられる、糸切底の埴と13世紀初頭と推定される楠葉型瓦器埴とが出土しており、高台付埴も同時期の年代に比定できよう。そしてこの年代は当編年とも矛盾するものではない。

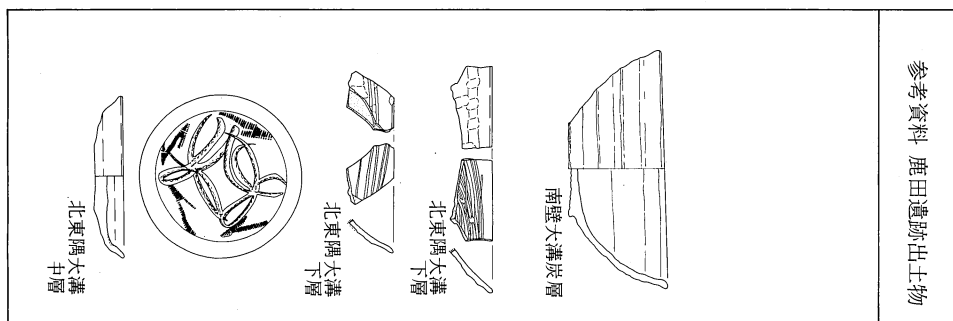
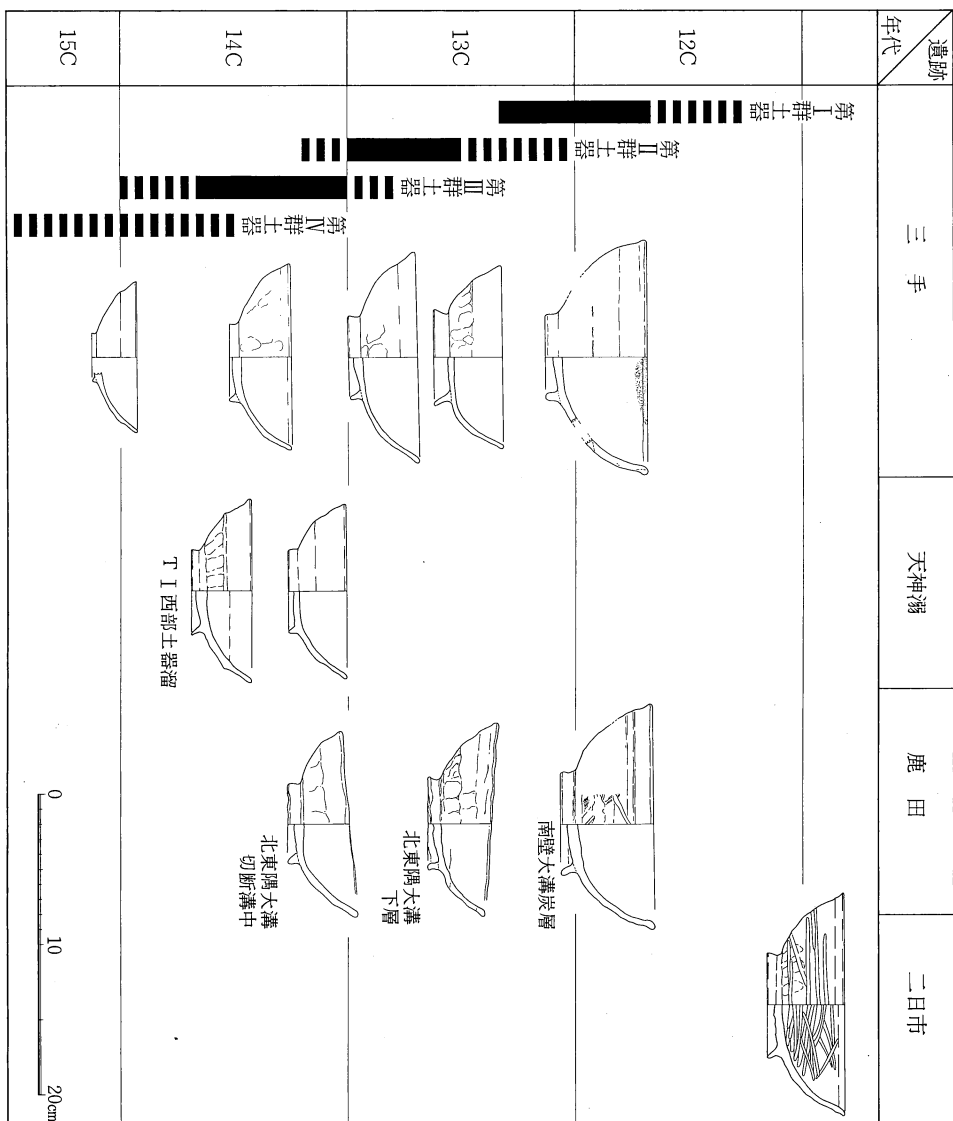
以上をまとめて三手遺跡出土高台付埴の編年を第36図に掲げておく。ただ、絶対年代は検討資料に依っても限定することは困難であり、巾を持たせて理解している。今後の修正・限定化に期待したい。

〈まとめ〉

早島式土器の製作工程、編年などについておおまかながらも記してきた。次に既述の整理から派生する二～三の問題について触れておきたい。

備前・備中・美作などにおける埴の生産は早島式土器に限られるものではなく、備前焼・勝間田焼^⑤でも焼成されていた。これら窯は多少の年代巾はあろうが、ほぼ同時期の成立と思われる。この時期は須恵器生産体制の衰微期あるいは消滅期にあたり、日常雑器供給に関して変動期でもあった。新たに台頭してきたこれら窯の生産者が、当時需要度の高い日常雑器の生産に乗り出していったことは充分ありうることである。須恵器窯が衰退し、かわって日常雑器焼成窯が生成してくるこの現象は、瀬戸内地域に限られるものではなく、畿内・東海地方など各地にも見られ、全国的潮流の一環として当地での現象も位置づけられよう。すなわち、早島式土器^⑥の実態の掌握は、当該期の埴を含めた窯業の地域的特性の究明に貢献できるであろうし、またそこに意義があろう。

さて、須恵器生産地を近くに控えその技術系譜を受け継ぐ備前焼・勝間田焼に対し、早島式土器には須恵器生産技術の影響はみられず、むしろ土師器生産技術の系譜を継いでいるように思える。ただ、窯の構築は土師器にはみられず、その点須恵器的と言える。しかし、この時期には工人間の相互交流などにより両系統の技術を体得した工人集団の成立が想定され、早島式土器が土師器あるいは須恵器生産技術のどちらの系譜を継いでいるかは、さほど重要な問題ではないと思われる。むしろ、早島式土器分布域内に成立時期が近似し、しかも須恵器的生産技術を色濃く残す亀山焼^⑦の所在することの方が重要である。すなわち亀山焼の生産器種は壺・甕・鉢を主として焼成しており、今のところ埴は知られていない^⑧。その点、同じ須恵器的伝統を継承していた備前焼・勝間田焼の初期の様相とは異なる。むしろ早島式土器と亀山焼の両者を



第36図 三手遺跡出土高台付碗編年図

合わせた器種が備前焼・勝間田焼と同様の構成を示す。この現象は、亀山焼生成時に早島式土器が既に存在していて、その工人が亀山焼生産工人による埴の生産を牽制していたか、あるいは、早島式土器・亀山焼両窯を規制していた上位組織の意志に基づく結果などとも考えられよう。ともあれ、当地では備前東部・美作と比較して、日常雑器における分業化の進展が伺える。⁴⁹

早島式土器は備前焼・勝間田焼の埴分布域の間隙を補うような分布状況を示す。このことから備前・備中南部への埴の供給に対して、確たる足場を築いていたことは明らかである。逆にみれば、当時の備前焼・勝間田焼埴の供範囲はさほど広域かつ優勢であったわけでないことを示すものであろう。⁵⁰このような時勢下で、早島式土器生産者は埴を集中生産することによって自己の立場を確立して行ったのである。もちろん、前提として当地における土師質系工人らの活発な生産活動が下地にあったことは銘記すべきであろう。

早島式土器が土師器埴とも須恵器埴とも異なる点は、形態もさることながらその胎土と色調に特徴がある。特に三手遺跡第Ⅰ群・Ⅱ群土器に代表されるように、その初期においては白色発色を意図していた蓋然性が強く、この点に早島式土器の製品価値があったのかもしれない。なぜに白色を意図したかの説明は困難であるが、当時、碗類で白色を帯びたものとしては木碗・磁器碗などの存在が考えられ、早島式土器が、それら碗類の模倣あるいは代用品を意図したと想定することもできよう。とすれば、木碗・磁器碗の普及が早島式土器の衰退を招くことは必然のはずである。いかがなものであろうか。ともあれ早島式土器の工人は、須恵器生産の衰退に伴う日常雑器供給体制の変動期に、需要者の好み、要求に即応すべく不断的努力を続けその生産を維持していたと思われる。

しかし、土器埴の盛行は短期であった。各地の土器埴は鎌倉時代末から室町時代初め頃にかけて衰退に向かう。備前焼ではそのⅡ期頃から埴の衰退化がみられ壺・甕・播鉢へと器種の集中化が進む。早島式土器では三手遺跡第Ⅱ群土器頃を盛期とし、次第にその内容把握が困難となる。第Ⅲ群からⅣ群土器の使用時期には、土器埴の衰退化は相当に進行していたと思われる。現象的には法量の縮少・高台の形骸化・調整の簡略化などを指すが、これら現象は埴の機能に係わるだけに、安易に製作工程上の合理化のみに結びつけることはできない。むしろその現象の背後に供膳具中に占めていた土器埴の地位の低下を読みとりたい。すなわち、飯用にしろ汁用にしろ埴は直接口唇に触れるだけに感触・清潔感には特に要求されたであろう。また、日常頻繁かつ粗雑に取り扱われるために耐久性も要求されたであろう。土器埴はその点、感触度合、耐久性ともに他と比較して劣位に置かれるのは免がれない。そのため、磁器碗・漆碗・木碗などが庶民層にまで普及してきたならば、土器埴は一番に排除される宿命にあったであろう。

供膳具の主役から脇役へと移るにつれ、整形の丁寧さが要求されなくなり、そのため簡略化する。そしてついには供膳具からも排除されるに及び土器埴は消滅してしまうのである。

備前焼は壺・甕・播鉢らに器種を集中することによって新たな市場を開拓し命脈を保つことが可能となったが、早島式土器は他器種への転換と集中化が果せず衰退・消滅へと傾斜していったものと思われる。

早島式土器のこの結末はその生産体制に既に内在するものであった。すなわち、早島式土器の窯の規模や構造それに灰原の状況から判断して小規模生産体制であったと推定される。また窯の集中所在も認められず、むしろ散在状況にあり、従来言われていたように「生活拠点」周辺で随時焼成されていたと思われる。その場合、製品の形態・胎土の多様性からして複数の工人が各地に分散して製品を生産・供給していたのであろう。一生産地の製品供給範囲がどの程度であったのかは、埴の地域性把握が不十分な現況においては確定が困難である。ただ、沖ノ店1号窯の製品は今のところごく小範囲に限られている。一方、三手遺跡第Ⅰ群土器と似た胎土の埴は、管見に依るかぎり幡多廃寺址遺跡・鹿田遺跡・田中京埴遺跡・延寿寺跡遺跡などかなり広範囲にわたり検出されているが、それら形態は多様性に富み、一生産地でこの全範囲の供給を賄っていたとは思われない。やはり、複数の生産地の存在を想定し、各生産地の製品が一部重複して供給されていたと考えるのが妥当であろう。

瀬戸内中部は、埴生産に限定すれば、畿内・九州地方の瓦器生産、それに初期は土師質の高台付埴の生産をしておりながら途中から瓦器埴の分布域に転じた瀬戸内西部とは区別でき、広義の地域性を形成している。その地域性がなにに由来するかは不明であるが、埴製作工人らの相互影響の範囲を示すものであろう。

早島土器は、瓦器と比較して規格性に欠けるとの指摘があるように、早島式土器製作工人相互間の紐帯あるいは規制は緩慢であったと思われる。それだけに各々の工人は独立自営的でありえただろうし、却ってそのことが社会的変動に際して負因となり、備前焼のように工人らの結集もみられず、技術改良・革新も果たされることなく衰微化を辿らなければならなかったと思われる。

以上、早島式土器に関して極めて雑なまとめを試みた。多々誤りを犯していることと思うが、大方の叱正を待ち後日稿を改め完全を期したい。また、文中での敬称は略させていただきました。御寛恕願いたい。

なお、本稿は三手遺跡出土物の整理・実測を行なった田代健二と神谷とが個別に稿をおこし、神谷が両原稿をまとめたものである。もちろん、二人の間には早島式土器の内容や把握の仕方について一致しない点もあったが、大方は共通の認識に立っている。本稿が早島式土器の研究に寄与することができるとするならば、それは田代の貢献に依り、事実誤認・表現上の不備などは神谷の責に依る。ここにお断わりしておきたい。

(神谷正義)